



官  
刻  
孝  
義  
錄

卷  
卅  
六

備  
後

1596  
36



1596  
36



孝義錄卷之二十六

備後國

孝行者

佐代宮支配所  
甲怒郡小堰村

奇特者

同支配所  
安那郡東中條村

奇特者

同支配所  
神石郡小畑村

孝行者

河部保勝守領分  
沼隈郡東村

孝行者

日領  
芦田郡福田村

孝行者

日領  
福山城下本町

百姓庄之節侍

頭百姓

百姓

百姓孫惠將

百姓志八妻

町人殿筋屋

市松

五十七歳

寛政五年  
御褒賞

太次郎

五十九歳

寛政六年  
御褒賞

長之丞

八十七歳

寛政七年  
御褒賞

六之郎

三十四歳

宝曆八年  
御褒賞

三之丞

二十九歳

宝曆十一年  
御褒賞

弥吉

六十七歳

安永九年  
御褒賞

孝義錄卷之二十六

孝行者 日領 浪濤郡上山南村

全田百姓

三大師 天明元年 褒賞

孝行者 日領 芦田郡廣谷村

百姓

千助 天明二年 褒賞

孝行者 日領 芦田郡五生村

百姓

長五郎 天明七年 褒賞

孝行者 日領 芦田郡玄生村

百姓五助娘

六人 天明七年 褒賞

孝行者 日領 品治郡向永谷村

百姓

二十郎 天明八年 褒賞

孝行者 日領 芦田郡府中市村

全田百姓助六娘

津中 天明八年 褒賞

孝行者 日領 源津郡北上市村

百姓

久之郎 天明八年 褒賞

貞節者 日領 芦田郡府中市村

全田百姓懷德屋主清後家

一子 寶政元年 褒賞

孝行者 日領 松平安藝守領分 世權郡津口村

組次

平八 享保元年 褒賞

孝行者 日領 日領之家末流郡甲斐給和 之上郡宮内村

社人佐清次男

三四郎 享保二年 褒賞

孝行者 日領 奴可郡入江村

百姓

半右衛門 享保五年 褒賞

孝行者 日領 世權郡高山村

百姓

六左衛門 享保六年 褒賞

孝行者 日領 之上郡中村

百姓

好右衛門 享保八年 褒賞

奇特者 日領 三縣郡白江村

百姓

三助 享保九年 褒賞

孝行者 日領 惠藤郡中村

百姓

半三郎 享保九年 褒賞

孝行者 日領 惠藤郡中村

百姓

好右衛門 享保九年 褒賞

孝行者 日所

好善妻

名不知 享保九年

孝行者 日所

日所

太希古 享保九年

孝行者 日所 惠養於竹地管村

百姓

助市 享保九年

孝行者 日所 三船野灰塚村

浮過百姓常去病娘

津杯 享保九年

孝行者 日所 三船野灰塚村

百姓皆去病娘

之 享保九年

孝行者 日所 世羅野大田印字村

百姓

沐之助 享保九年

孝行者 日所 奴可野大佐村

浮過百姓服治至女子

在在馬 享保十五年

○貞節者 日所 世羅野高山村

町人漢田屋成八節法家

之 享保二十年

孝行者 日所 世羅野院島外浦

庄屋

八之節 元文四年

孝行者 日所 三河郡系村五日市町

百姓服治

甚之湯 元文五年

孝行者 日所 世羅野野賀村

百姓

庄之湯 元文五年

孝行者 日所

在在馬

之 日時

孝行者 日所 三河郡系村十日市町

百姓乘車師

之助 寬保三年

孝行者 日所

之助母

之 日時

孝行者 日所 世羅野後目村

百姓忠之湯娘

之 延享四年

孝行者 日所 世羅野浦野村之内太盛村

長百姓

五之湯 寬延元年

○孝行者

日領 家本後甲斐給紙  
之上郡川西村

百姓助三郎妻

乙 年六歲

寶曆二年

孝行者

日領 日給  
甲怒郡矢野村

百姓

乙 年六歲

寶曆三年

孝行者

日領 惠藤郡高山村新市町

百姓花全平市娘

乙 年六歲

寶曆七年

孝行者

日領 惠藤郡河北村

百姓加藤清娘

乙 年七歲

寶曆九年

孝行者

日領 日所

日

乙 年六歲

寶曆九年

孝行者

日領 家本寺西谷給紙  
奴可取小奴可村

百姓寺本為時

乙 年六歲

寶曆十年

孝行者

日領 奴可取入江村

百姓徳三郎妻

乙 年五歲

寶曆十年

孝行者

日領 奴可取大佐村

百姓

乙 年七歲

寶曆十年

○孝行者

日領 日所

新右衛門

乙 年六歲

日時 寶曆十年

○孝行者

日領 之上郡正系村

百姓

乙 年七歲

寶曆十年

○孝行者

日領 日所

新右衛門

乙 年九歲

日時 寶曆十年

○孝行者

日領 之上郡系村十日市町

百姓余以余源為妻

乙 年八歲

寶曆十年

○孝行者

日領 惠藤郡三河内村

百姓

乙 年八歲

明和二年

○孝行者

日領 日所

新右衛門

乙 年八歲

日時 寶曆十年

○孝行者

日領 惠藤郡上村

七田百姓十一郎娘

乙 年八歲

明和三年

○孝行者

日領 之上郡中村

淳三百姓

乙 年八歲

明和三年

○孝行者 日頃 三嘉郡大田御村

○孝行者 日頃

○孝行者 日頃 三嘉郡灰塚村

○家内睦者 日頃 三上郡春野村

○家内睦者 日頃

○家内睦者 日頃

○家内睦者 日頃

○孝行者 日頃 三上郡永吉村

百姓

二六妻

二六 明和四年 喪 貞

百姓

二六 日時 喪 貞

長百姓

八之助 明和四年 喪 貞

徳丸吉平

徳丸吉平 安永二年 喪 貞

市左衛門

市左衛門 日時 喪 貞

日家内

か人 日時 喪 貞

百姓孫七後家

十人 日時 喪 貞

こが 安永六年 喪 貞

孝行者 日頃 山形郡院吉村

百姓

孝行者 日頃

貞十郎

貞十郎 天明二年 喪 貞

孝行者 日頃 三上郡長木村

百姓

庄三郎 日時 喪 貞

孝行者 日頃 三上郡入若村

百姓孫三郎吉子

哉三郎 天明二年 喪 貞

○孝行者 日頃

日家内

長七郎 日時 喪 貞

孝行者 日頃

文彦

文彦 天明二年 喪 貞

60 孝行者 日頃 三上郡入若村

百姓 三上郡文三郎後家

也人 日時 喪 貞

兄弟睦者 日頃 三上郡任賀和志村

百姓

三郎 天明二年 喪 貞

子太郎 天明二年 喪 貞

兄才睦者 日所

兄才睦者 日所

兄才睦者 日所

奇特者 日所 二次郡下板本村

孝行者 日所 二上郡上谷村

孝行者 日所 二上郡上谷村

孝行者 日所 二上郡上谷村

孝行者 日所 二上郡上谷村

長十郎 六十歲 日時

孫三郎 五十歲 日時

孫三郎 五十歲 日時

孫七 六十歲 天明三年

孫七 五十歲 天明四年

角三郎 三十六歲 天明四年

角三郎 三十六歲 天明五年

市右衛門 三十八歲 天明五年

孝行者 日所 二上郡正平村

孝行者 日所 二上郡正平村

孝行者 日所 二上郡正平村

孝行者 日所 二上郡正平村

孝行者 日所 二上郡正平村

孝行者 日所 二上郡正平村

孝行者 日所 二上郡正平村

彼治

百姓

百姓

新發

百姓源助妻

百姓新七娘

百姓

百姓

吉右衛門 五十歲 天明六年

志助 五十歲 天明六年

新發 三十一歲 天明六年

如孫 十八歲 日時

史七 三十一歲 天明六年

心七 三十一歲 天明七年

如右 三十四歲 天明七年

伊左衛門 三十一歲 寬政元年

負節者 日領 三次郡富津村

孝行者 日領 比洞郡尾道町

孝行者 日領 比洞郡尾道町

孝行者 日領 比洞郡尾道町

孝行者 日領 比洞郡尾道町

孝行者 日領 比洞郡尾道町

孝行者 日領 惠藤郡門田村

孝行者 日領 三輪郡灰坂村

百姓六人 源氏家

源氏町人 三輪郡市原

町人 津島

町人 全盛

源氏町人 借在位七人

源氏町人 借在位

百姓

百姓

乙女 寛政元年 褒賞

乙女 寛政元年 褒賞

乙女 寛政元年 褒賞

乙女 寛政元年 褒賞

乙女 寛政元年 褒賞

乙女 寛政元年 褒賞

乙女 寛政元年 褒賞

乙女 寛政元年 褒賞

孝行者 日領

孝行者 日領 三次郡系村

孝行者 日領 三次郡系村

孝行者 日領 同領家末法中甲斐給

孝行者 日領 同領 比洞郡尾道町

孝行者 日領 同領 比洞郡尾道町

孝行者 日領 同領 比洞郡尾道町

源氏百姓

源氏百姓

源氏百姓 借在位

百姓

百姓 平存馬

百姓

百姓

庄松 日時 褒賞

市内 寛政二年 褒賞

平次郎 寛政二年 褒賞

甚三郎 元文元年 褒賞

友人 寛保三年 褒賞

源七 安永八年 褒賞

如光 日時 褒賞

兵八 天明元年 褒賞





ありの小吏にしてちとせは親族のうちに貧しくと老  
 めしちる者根とていへんくそねむひをさばくのりそま  
 人ごまう人をあひむくこ田乃さうひ目白人は縁  
 且用水のわたりふと水より多とつり多計りて  
 ぬ事あるといふこといさうも替り事なく水下り  
 かう溝とていへんあれりとのよわらんやうにとをそ  
 やうそをそつり村のうらたぬのもねく助りや  
 とみりていさう享保九年二月領主より根をいそん  
 褒美やうに父母乃りていひ出て涙落さうとらん時り  
 年七十一なりつ井又其根と祈禱寺におりては根ねの

事小用のうとていさう領主乃りて是れ日武運を祈り  
 國恩を報とて飲の弁化りてとていひたりと後も  
 意りて其村のうらた鑑とてあれとてとて田主二年八月至  
 て褒美しけりとい

貞節者むめ

ひめりて清調形宇津戸村乃組改半三流う娘あり十八  
 され日世羅那高山町の淡田屋候八年に嫁り家の  
 ととていひ田畑の候なりと耕し麻苧綿衣類たて  
 鉄漆物又と穀類茶塩味噌やうのりれりてをて後  
 ひとりむめ人とあり孝むりて男姑もつりてい



食き中より老ゆるの如く思ふるやんかむと  
 舅姑の如くとならむと云ふ一語を爲しては存する時  
 とうりあつた志を起し安否を尋ね孫抱ふるれど  
 くれりつらむらぬとなく思ひつらむらぬは儀八郎  
 う病成助けては法の女抱意するや一儀八郎うせり  
 後おれは親里はゆりしうは儀八郎の家業を多たせし  
 とうりあつた志を起し安否を尋ね孫抱ふるれど  
 有徳の如く思ふと云ふ一語を爲しては存する時  
 うれりつらむらぬとなく思ひつらむらぬは儀八郎  
 妻を失ふと云ふや女抱ふるとも思ふ一人は娘

一人あせるとの如く思ふと云ふ一語を爲しては存する時  
 うれりつらむらぬとなく思ひつらむらぬは儀八郎  
 娘を病く死せしうと云ふは再嫁をよとすむらぬ  
 多かりしう齡七十にとす人教舅姑と云ふを云ふ  
 ぬらぬの如く思ふと云ふは外より聲ひきて  
 漢田を乃孫つと云ふと云ふは儀八郎の如く思ふ  
 舅姑の如く思ふと云ふは儀八郎の如く思ふ  
 夫つらむらぬと云ふは儀八郎の如く思ふ  
 子精くあせるとの如く思ふと云ふは儀八郎の如く思ふ  
 高ひ日暮と云ふは儀八郎の如く思ふ

りて死すく夫を於鵠野に調ててくを世姑のまゝ茶のたて  
 も綿をたてりその料に乞へて世姑にこゝろを成ぬると  
 黄代ちの菓子園子に教あて来りおてもやうよ買ハ  
 りとらうと姑乃とてまゝとて世姑のちおりてとよ世  
 ちの夕むつちとてくくしあり隣よとて於組合の若  
 末のてとらう孝行のようを尋へて買あてて人あむめ  
 ちとてとらう十八まはるてとていよとていよとて  
 申ねく姑ハ氣うかくてとらうをねとていよとて  
 和らうあら生れつとていよとていよとていよとて  
 も堪うとていよとていよとていよとていよとていよとて

と涙を流ぬとていよとていよとていよとていよとて  
 九月迄主にすえとて褒美乃とていよとていよとて  
 おけとてハ甥の虎松とていよとて養子とていよとて  
 同年十月おち五石七年ありていよとて孫とて長くとて  
 後貢とていよとていよとていよとていよとていよとて  
 半云流う家に古とて文書をもちつていよとていよとて  
 とていよとていよとていよとていよとていよとて

孝行者をて

をてとて上郡川西村の百姓助とていよとて妻とて母ハ二十五  
 年おに父源右衛門とて離別せらるる世母はとて次のまよ



海り金りたり給よとらてとらとやうに心をあつこり家乃  
うら睦しくありし事をもと村まゝにひりて傳へられた  
寶曆二年三月領主より獲取して並にとらをとり  
け村を領主の家よりつゝる淺野甲斐たより老の給地  
乃百姓なりけれ、甲斐よりとらを目とてとらとありて  
〜とねん

孝行者甚七

孝行者の事

正七とて上郡正系村にて生りつゝふと斗あゆむと  
多岐百姓たり父を長右衛門といふ母を正七とて十一年の

時よりとらとて後の事を述入しよ正七の幼少より  
生れつゝ孝心極く父を侍り及んで長まゝに母を  
母を乳母乃とて思ひてつゝはく人々の徳母を利  
欲うたれむとせよとて心をもつて甚七とありて  
よと自らとてとらとてつゝはく人々の徳母を利  
たつとらとてつゝはく人々の徳母を利  
や人とあるふとつゝはく人々の徳母を利  
へつゝはく人々の徳母を利  
あもむる徳をせ免さいるめともつて恨たつ事なく  
徳のひたりとてつゝはく人々の徳母を利

多ふかたされど日夜に女抱し多食をすくし稚子あは  
 しては教へてまよつたひ様とて衣を人目とほくみく  
 衣をよく川色より物お洗ひさうたしう終るよそく  
 くふりぬくふくくくふくふ生れさきハソくくくくく  
 へく衣被も甥姪ふくまけち賜う娘よは形えとても  
 幼くともぬをさかりりともゆよわくぬるまをく貧しく  
 中めて後のまともあつて移ひあまると此節とよま  
 まをぬりなむとまうしと地里のりれも涙おくて年  
 比つらうく姑をかく慕へらそのゆくと感くあり  
 父も八十五歳よありて移あもくよまうをゆりく

生とつと柔和あくく人くもゆくくぬりぬり  
 志せら娘くく善くくくくまて農事たつて先ようけ  
 めくつ妻は舅乃例とまされち食もくともけを異  
 を母まひ物く起てま成まうく舅のま足を撫さ  
 たりて稚きりぬをぬくまよまはるくは胡夕のま  
 まをふ食すの外あをゆよふくくゆのく味くくあ  
 へまに酒をぬくくは貧を中まを日くいたや次  
 下まの親族遠まありぬもま志と感く食ぬふと  
 賜せらうくくひく舅にまあぬくくぬくま  
 くゆくまやまをまゆりて後とまをくく入うぬくく

孝義録卷三十六

十四



了録しつて貧窮ははくしとてむすむすのていふ  
 くるまぬる人なく富ふ人ともはよりそれしとある  
 存せんとてそを次とてしむもそを齡とゆふもあ  
 んとていふあとう甚七よふたうて親くそれとよ  
 ても好松とてふりものと甚ふとてうあれも夫婦の老  
 乃ゆふもいよあていひく祖母と父母はうつて人農業  
 而してかてあていひく貧苦にせぬりてわらたら家乃  
 貸後とてよむれ中人移り隣家のりれんうよ悲ひ  
 と村のうられいひくをうけともゆふとてうよ夫婦と  
 もいひあていひくもいひくか中あていひ人種をうてい

のあていひく此施をうて人あていひく  
 ちいちやうかふすいひくあていひく  
 十一年五月頃壬子うて復更とていひ茶とていひ

孝行老翁

きんたてて汝郡魚村の因十日市町乃念頃を源有馬の  
 妻たう十一歳前日此家にくらうていひ男姑よりいひ  
 久史由と睦くわていひ男忠右馬のハ七八年これいひ  
 姑と二二年うていひ病りうていひ又六歳あうり  
 といひいよあていひ男子虎之助とていひかどあていひ  
 家乃うらむ人くもていひ人け病者うていひ病のていひ

却くくくゆといつとも引あうふつとくく松をさう  
 つくおゆぬれをさうくく業もなうとかぬくりと  
 けりて町子もむとく人とて言一石八斗あぬりれくけり  
 多飲田を耕せしう今いふもさうくあくくてお徳  
 乃ららと人かいつもさうくおあときんくも他して  
 隣家の老翁をすけともゆてくくくくくく貧苦  
 して給夕れ烟をたぐくくくくくくくくくくくく  
 半ばさうくくくくくくくくくくくくくくくく  
 短氣さう生れたる上さうく痛く侵さくくくくく  
 むくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

久しれよつとくくくくくくくくくくくくくく  
 多くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 乃敷まで買求りてゆすく先日夜二便の事とをすけ  
 してさうくくくくくくくくくくくくくくくく  
 とれくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 人乃を免くく布本綿をくくくくくくくくくく  
 けりてけりて去年の長きんをくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 痛者と親族乃りくくくくくくくくくくくく  
 てと病をさうくくくくくくくくくくくくく



ひらり主婦とも小忘教事列異とせばかくは  
 かく敷帳をいにかきとら竹ふて梅の形乃も花を作  
 古の帷子をおひくやを梅を花と敷をひか  
 ちの父を老さるるときはよく健なるものなりけ  
 是は農業の事とたゞ人として朝夕勤るを立出  
 を勤る事ともいふ妻ふれものまでわが心を  
 の田畑乃もよまらぬわが心もよくわが  
 ひと先がぬらうに家もわが心もよくわが  
 りとわが心の健なるにまよなく程よくわが湯  
 茶をわが心もよくわが心もよくわが

田乃面小ありて栲麻を踏しゆん父をわが心もよく  
 引てをわが心もよくわが心もよくわが心もよく  
 ひきとわが心もよくわが心もよくわが心もよく  
 ても食物を調へ茶を煮し主婦しやうりか  
 番小をよわが心もよくわが心もよくわが心もよく  
 うちよく茶をすし主婦もよに市町よわが心もよく  
 ちよくわが心もよくわが心もよくわが心もよく  
 ちよくわが心もよくわが心もよくわが心もよく  
 中こつちよくわが心もよくわが心もよくわが心もよく  
 をわが心もよくわが心もよくわが心もよくわが心もよく

て食せしは心細くつらてそく之たやと申すく調  
 しと申すや正月又とみ草白成と所乃種糸よりハ  
 小魚もとも鯉節もとも求りて母父いにくもを父乃  
 酒を好む事かくして心の樂とてかうんとて友  
 としての法をあつたを備へた物候とせ或ハ飯米  
 に之くこと時を父もけあうとてさうらは是るさ  
 とぬよたうくうと父のを迎へぬふとぬと家のうち  
 乃り此一町をりもかきうとてあつて暇をいひぬる人  
 きわらば考へ遠くうらうとてとれぬと休ませぬよ  
 つとて松明をとりかゆなり新嘉つう業は日く那元

常谷といふあうらむく二十年をぬるありし  
 親里までと一里あり此のあまを作を清つゆり  
 娘乃りあま出るるをこころいしは日一度もり  
 えはぬむむるもあつた事あれた速く久しう  
 舅の心を安うらうし母の十六日あまうせく孝吉  
 の着るものどおけと目く食食物又とありてい  
 靈茶にそく入村のうら此控をちり人日苦半紙  
 勸りくるとは二夜十月迄まうり寝てあつてまど  
 あつて

孝行者之六



大雪ゆり寒くもさけしと云はれしころ乃西の路も  
 きて市町もわたりしと商人とて東らひ父の  
 子にむす者なきもあはげしと云はれしころ乃西の  
 して川をまたて道ゆりわたりしと出るとは憶ふも  
 くの路人の心とてわたりしと云はれしころ乃西の  
 色路らむしと云はれしと云はれしと云はれしと云  
 ありしと云はれしと云はれしと云はれしと云はれ  
 川をよりしと云はれしと云はれしと云はれしと云  
 憶ふもさけしと云はれしと云はれしと云はれしと  
 小のころと云はれしと云はれしと云はれしと云はれし

事全く更ぬる者なりあはれしと云はれしと云はれし  
 のひらけりしと云はれしと云はれしと云はれしと云  
 麦の株にうてを焚く小ちのれりあはれしと云はれ  
 なきくしと云はれしと云はれしと云はれしと云はれ  
 乃て大麦の株にうてを焚く小ちのれりあはれしと云  
 の麦の目と云はれしと云はれしと云はれしと云はれ  
 大目と云はれしと云はれしと云はれしと云はれしと  
 かのうりしと云はれしと云はれしと云はれしと云は  
 芳をゆりしと云はれしと云はれしと云はれしと云は  
 事全く更ぬる者なりあはれしと云はれしと云はれし

一とつをのりたは酒を好むとつ入ると父乃く  
 ひとこれいあへて乃むるまうとむと四月の苗代のは  
 農多小出ふとく父に食をすく然て後と苗代乃石  
 一り其うたをけよと妻小の心をさておひしよ妻の  
 其向ふもあまのいゆよ其於事ふとと叱り  
 に日は田螺を好むあまををうくよ拾ひ得ては  
 すとあまつらとくくさあてそ苗代もととれつ世を  
 つよせふとあまい入のふもとはあて叱り  
 とく妻にむいへて後悔し入りて然ひしもあう  
 たりとあるは妻をうく長百姓六左衛門つりふいり

夫乃つらあるあまやけをば物をとくをてあしゆ  
 くのと世つと先をくく給をれとつよ又驚りてとく  
 其うとつよあは秋思ひ乃あは不伴して己う抱るの  
 細兼いあしと然り地のここれ兼六七後もたるせしけ  
 是いそきあへんよ福のかすおくしあ父を喜抱入  
 き料をく明日とてとらぬ老乃其れ食よとやせ  
 ぬいあんる心若くせんぬおくしてふとととつよ  
 其六左衛門もあつとつて常いをうくは公納をわ  
 ず親うとつと法うあるもあまいしとつらよと  
 後の兼は不足あうんと庄屋も若くもしつ入く



尤なるはこ飯米の料よりあもわらへんといふは  
 力をゆく海を拭ひつゝ農業に出りしり納りて  
 あらういふはあひ乃ち取實もあれは左邊つをも  
 於んさうりしりさうり志小感して礼つひく  
 とせとの比をさつうれりのももを孝かんと感し  
 米一俵を好りしと父よ見せしり父うれ米を我身  
 より好りしり外の費にふせと取きありともあつし  
 くせよとつあひさうて俄に綿を求り煖は父にせ  
 夫婦と小悦ひくともんる貧しきりのたのれは  
 已う田とあもすふらせと家のうちになうく人乃

身うたよ耕し又今日傭は出く人うととの孝か  
 と感して夜にぬりぬりさうり決こ田わらひ地  
 しみあ水をそりつるさうりく父は農業せしり  
 名のとも別するまを遊れあのと年ひあへりしと  
 二十六うけつとさうり已う田よりとと先よ人の田り  
 水口をひきりしり人をも修るひあつとて五日をす  
 けあふりしりさうりぬらふし妻を切りしり父母は  
 け村乃五三婦といふりぬらぬられて彼りしり人とな  
 かりしり妻もさあしり娘を母乃しりちりしり  
 け難産のしりさうり心りさうりけりしり海を見しり

と買ひあつたゆゑに子とてむすひ女の定めの事なる  
 後なり買とみとてあつて親里に之を奉りやあらとせ  
 先づえをれとての親ふりてく稱あつとせらるる  
 つまむとてふ小唄のうた後あもぬらちのつとて人  
 里村の産屋役人となつてふの家れわらうとてさうな  
 ぶ六本よのわけて柿とてうりてうりて役人となつては  
 して初とてはさうさ百姓の人組の若なりとてさ  
 くりとあつたはれとてあつてとてさうてさうてさう  
 乃ありわらうこれのわらうとてさうとてさうとてさ  
 りそのはれとてさうとてさうとてさうとてさうとてさ

明和四年六月癸亥とて後とてさうとてさうとてさ

孝行者八之助

八之助とて之籍郡灰塚村の百姓なり父は清六とてあつた  
 兄ある勤太郎とてその家とおろしうせしうあつたに  
 あつた時父をさうしうは伯父乃勤太郎とてさうとて  
 て人となつしと勤太郎にさうけとてさうけ八之助と  
 養ふとてさう八之助と十八歳なりこれ勤太郎も病て死  
 せしうとてあつたもさうとてさうとてさうとてさうと  
 八之助とて人となつた眞實なるものさうとて農業とて  
 其の眞實徳の教とて貪とてさうとてさうとてさうと

ちうく農事のついでに薄上草薪と刈道乃をひと里半より  
 もあかしく見罷坂といふおもしろくもていへりし  
 あつていへりしとあせつてをりしとさうつれし母子れ  
 秋つて油くして母をへし助う兼さん小おらりし  
 ちうつて母の守にありしとあつていへりし  
 あつていへりしとあせつてのちうき油ふとつていへりし  
 ちうつていへりしとあせつて正月又ち節句の礼を  
 けえしちうつていへりしとあせつて母をへりし七十一  
 歳よりいへりしとあせつていへりしとあせつていへりし  
 つとめ一村へ嫁し居りし姉もあつていへりしとあせつていへりし

りふかと合せしあ女抱せしとあつていへりしとあせつていへりし  
 側をなすちうつていへりしとあせつていへりしとあせつていへりし  
 よとあせつていへりしとあせつていへりしとあせつていへりし  
 ちうつていへりしとあせつていへりしとあせつていへりし  
 ようつていへりしとあせつていへりしとあせつていへりし  
 ちうつていへりしとあせつていへりしとあせつていへりし  
 りし食物よとあせつていへりしとあせつていへりし  
 晦日の夜天氣とあせつていへりしとあせつていへりし  
 ちうつていへりしとあせつていへりしとあせつていへりし  
 通一夜しとあせつていへりしとあせつていへりし

らる隣村小村岳音寺乃二王小糸糸籠くくうけ比々  
 雷ゆらとあまを丸田んをわらもあつたのたのた  
 ちりりあふまをいそいでた病あけくして食物も  
 をこころあけくくをこころの粉りてつくねる固子を  
 りははよきく吐かせくといふ物そのまじいまじ  
 てかく味のよういそいでたまをまをあつていそ  
 今一口あけくいそいでたまを母もかといふま  
 つ井は母のまをいそいでたまをいそいでたま  
 ちりりく志のあつてまをいそいでたまをいそ  
 及ては親族より睦くいそいでたまをいそいでたま

寝てはる目とこころあつて

家内睦者市左馬

家内睦者か

之上郡春田村乃長百姓市左馬ハ拍る十六石六斗あま  
 つまね者なりしをれお代乃祖と在馬つ子に後妻市左馬  
 二女馬つといふ二人の兄あり婦子の後妻馬つといふ  
 後とれ子を後左馬つといふしつと初をれく後妻馬つ  
 市左馬つといふ最をつとてをふふとて後妻馬つ  
 にあつてせとの次々実子よてあつて小婦子とれは今の  
 市左馬つといふ代とてあつて二人と後妻馬つは出市左馬つ子

乃娘二人は女は嫁し男子二人は娘として父の後身  
 とお妻ふとのにあつて十二人后を同うして睦く  
 くらきり父は左馬の同村をうら山津田谷とつふふり  
 久しきすきき長百姓をうらうこれ市左馬は億り  
 てのちいふ市左馬はまのせを重しと一村の事と  
 りとうう家乃らら細やうあれるまきく父はむら  
 とと流とまう流とまのひひよとまきくひまう片田全  
 のまふれいふま礼義を言葉とらうくく流ふ  
 市左馬は流の支ぬらうのまきくくまのむらにうら  
 まきくくまの流も老父を流ひうらうまきく此

家乃らら流りの和順して孝悌の心ゆく父乃後身の  
 まきまきりうとれうまぬらうのふらうまきりう子と  
 流くしうらまきり流くまの妻も流風とまきりて  
 町まきり流くまにまきり流く山津田谷の流流流  
 村乃山津田谷といつ世のまきり一里まきり流くま早此  
 憲まきりまきり流く流此村うらうま百二十石あまりも  
 あらうらま流組改まきり流くまもまきり流くま  
 と教訓乃力とまきりまきりまきり市左馬は長百姓を  
 してあけく流流の念流は導くまきりまきりまきり  
 流く流く流流もまきりまきりまきり二年国こ

月夜まじりの寝衣として市に賣つて是妻と家乃也此  
の上人と小島月をこくととらせり

孝行者こと

とこく之上船永末村の百姓孫七の妻あり父と同居実  
田村乃百姓作を孫としりぬも二十日まあよけぬ  
きつきの舅姑とと小老裏へし孫七を耕作とて  
とてをせりこもとてしをすけり回世に志こいふ  
又と山林よけつとしくも志こくを人りて舅姑の  
用を毎く熟丹心とつもぬを法をくくつてつて  
初て食物も走くこいふこくも来りつてをすり

りの小島足ちるこゆとあつて其の志こくの中よ  
くひやとれやうに細くをりそつと舅新六と目せ  
ぬ孫身はとてこいふこくゆかろなく也は中風と病  
しつと物にひかりこいふこくはもとてかろこいふ二夜の  
かろひもあつてこあれはけとこいふその用とてをせ  
しはつこいふこくはもとてこいふ老とてはく用あり  
とてけんとてこいふ事とあつて姑と七十二歳より  
あつて十は茶と物のけねをうよなるをこいふ  
後とてはつこいふ物とあつてこいふこいふはつ  
とつ或も道なりとてとて教をこいふこいふ

物やうらふふ心なほこめくあけく女抱せしは親族の  
 りのおとまりておき姑の物くかりしれいつれ  
 事志いせんもさうりかやし夫婦ととに志りしり  
 乃敢てしうつしやあさ姑の心を和らそめらる  
 りやあさんとりあはされし今別居せよをさうり二  
 人さきかききぬんさうりしあきゆふ姑乃  
 心さきかききぬんさうりしあきゆふ姑乃  
 うぬさきかききぬんさうりしあきゆふ姑乃  
 さうりしあきゆふ姑乃  
 うぬさきかききぬんさうりしあきゆふ姑乃  
 さうりしあきゆふ姑乃  
 うぬさきかききぬんさうりしあきゆふ姑乃

結ひ九年若小夫婦とも稱うさうりし孫七と養子  
 とつと共く意うらうく薪をも親乃りこふさうりし  
 こら日これあさうりしあきゆふ姑の程いつりし  
 ちあめのかさうりしあきゆふ姑の程いつりし  
 次於て此食物やせりあさんさうりしあきゆふ姑の  
 戴さうりしあきゆふ姑の程いつりしあきゆふ姑の  
 りのなうりしあきゆふ姑の程いつりしあきゆふ姑の  
 詞をなうりしあきゆふ姑の程いつりしあきゆふ姑の  
 直敷さうりしあきゆふ姑の程いつりしあきゆふ姑の  
 恥さうりしあきゆふ姑の程いつりしあきゆふ姑の

て舅にさせ姑をいひ入るゝのふをせむとこしり  
 子拭乃神ありて金しきぬとつゝのあはれきこ  
 せぬとて二三日もつゝしすゝゝ新ふとて  
 志を棄せしふ小目も人もいへとてあつゝぬと姑一人側  
 よありてはむりともしとて又親族乃ともいひて  
 七年のあつゝのぬ家ふ入りしは姑の物つゝり  
 とていふ金中つゝり舅の食ももつゝりいひぬれとこ  
 こもつゝり著とてとてつゝり背むいぬと寺社つゝり  
 うゝ親族乃いゝとてとていひゆく道とつゝりもつゝり  
 あつゝりつゝり律の物つゝりつゝりつゝりいゝ家とつゝり

又まともなる者あれとつゝりつゝりつゝりつゝり  
 身とつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり  
 をつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり  
 関つゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり  
 に史跡七とて睦の病をうせ入日とてつゝりつゝり  
 舅れ病さへ月とに如つゝりつゝりつゝりつゝりつゝり  
 まつゝり一人乃力とつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり  
 人を産つゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり  
 つゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり  
 小作物乃志つけ薪のきりけきりなくむとつけ



初を志し次曉比よりふるふと目とを  
 をしるるより去来乃春より言をこれ枕す  
 つとくもわたくし身にまゝ衣をい肩を結ふ  
 結ひつり髪と葉めく米絲つその年北十月は  
 夫は死く同十月に男も七十歳より年たうくつ  
 に生かすはとて追善のいさるくつあつた  
 不幸に姑を力と落しつと悲しむつその  
 ついつつも出来て今とこと睦くつと  
 是より安永六年八月領主より褒賞として  
 米とあつた

孝行者文彦

文彦は二次郎入君村より持高十石のりぬり北百姓也  
 父孫二弟ふつとて母を七希とつとけりめのと養子  
 中より後政次弟文彦とて二人の子生れせし孫  
 二弟のいよも養子と実子と同居成るは未くの  
 事ありあつとて母を七希とつとけりめのと養子  
 に養子とてつとて母を七希とつとけりめのと養子  
 孫二弟より健日田畑の勤りともさつと政次弟と  
 病くつと孫二弟中風乃病よゆつとつとけりめのと養子  
 未承とつとる文彦よりつとつとけりめのと養子

に力をそそぐ父の病を母れをすげしと云ふは  
 母も又病うふくは文蔵一人もく父母の病を  
 苦しむ直後と病くをそそぐも食味と個々田  
 畑も大う人小あつけ作せく父母を女抱とる  
 乃外抱する母も文蔵とるもわくわく  
 まやうり女抱とるもわくわくわくわくわくわく  
 の二便始するもわくわくわくわくわくわくわく  
 ひたひたしてこそ芳苦とるもわくわくわくわく  
 母の心をやと先あり冬あともとる火煙く火煙  
 にききんと思ふと火乃用心もわくわくわくわく

本編乃こそと小色と父母のつ移るもとあくわを  
 小少日新とつて二次町はわくわく賣時と必悔葉子  
 乃そそひを求り入りて父母のいと熱やとるも  
 妻と遠くくあきも又先屋に舅姑もつて人父母  
 の寺小徳んとつては文蔵父と背おひゆと妻と  
 て母れ例日あくく先又母を面ゆも付く妻と父の  
 きんよあつてとの所用をわくわく夫婦ともよんを  
 く別家にてわくわく七席も夫婦も折くよとひ来りて  
 起居とよあわわ付父のくわく家日あら文蔵夫婦  
 と別家よすりふ七席夫婦とく福んはよきひと





内のみもふまうせ候とふ父此病をうせんと  
 母乃んをいぬまうせんもをい何事よても母よ  
 ちうとふ事な〜暑候時と父乃いぬらまう候を  
 といふ〜いぬらまうと候をうけおひて  
 蚊をうせとせ候時と父乃用いも危れとせ候と  
 り起居く火をい〜せいぬらまうと父のりり  
 必し〜火候まわ〜近まらりいぬらまう候とけ  
 せら〜つ〜ぬらまう候とをぬら〜い〜い〜作れぬ  
 烟葉とも賣つ〜と父母乃食ら〜人なり父の〜  
 病候とせと年とふ〜四月の法ら〜及乃ららは

家乃内ふをる事といひ日とふ屋よ出ると行ふ  
 病と作るとぬら〜古候候と〜日候〜あゆ  
 とり〜は〜い〜い〜日候候と〜けあつと  
 せら〜候と〜病候候と〜妻は〜直前に〜せ〜うと  
 人〜候乃妻候と〜せ〜ら〜い〜難候の中ふ  
 せら〜い〜い〜い〜い〜百姓と〜睦〜と  
 直貢らと〜清ら〜ぬら〜力と〜人〜を〜け色と  
 家も貢〜と〜と〜年と〜貢と〜く〜好〜知〜  
 乃百姓と〜又病候〜風と〜み〜ら〜ひて〜る〜よ力と  
 せら〜い〜い〜い〜い〜天明四年八月領主〜り褒

吳とて弟とあつて

孝行老新菴

孝行老新菴

之上郡正原村の百姓よとつらつに二斗ありて  
て於新菴とつりぬあり妹をう孫とつり父を貞  
助とつひて十四年若くふくなどつりけし新菴ハ  
十歳の子ハみ業よりき母は同郡川西村の百姓孫  
三郎の娘よつては家に來りて舅佐之助史婦とつり  
くつらつに史もつては年も若くけしとて菴菴郡川  
北村乃百姓次助とつりふりぬよ再嫁とつりつらつ

おつらつハ佐之助つりつらつと史つて新菴も川西村より  
つらつとつて思ひつらつとあり其比佐之助とつ六十八歳  
小つらつとて妻ハ六十五歳より野山乃業ハつらつと  
けしとあつらつをさ田と耕つらつとれとつ小歴紙  
を渡く二人の孫とつらつたつらつ二人とつらつ  
正直なれ生れつらつとつらつ祖父母の教よつらつとつ  
かつらつとつらつ新菴十二歳よりとつらつとつらつ村乃  
らつらつ作つらつ史に出或とつらつ小薪とつらつをれお  
りぬよと史とつらつとつらつとつらつ貸米とつらつせつらつ  
ふらつとつらつたつらつとつらつとつらつとつらつ七八歳よつらつ

家の内乃用るるといれまへ角人となれよとて  
 て孝ふあつゝ祖父母父母とを供て居ねとて  
 まのやたつゝ農する又は道とて歩り行とも祖父母  
 乃む孫を何いふらあつゝいふにとも申ふ  
 祖父母とやうく家人の事紙をくるもたつゝ  
 多終んか孫も瀧るゝの農業とて新築うまふ  
 悔とて老をう老い喜ひたりとて天の二年  
 乃はうと祖母申風とやうも是もかるゝ  
 同日七月よりせめりゝ病の苦し起しを  
 業をそとて二使乃時と抱くゝあとの月とて

く事食くゝ事若くゝ事のものも走ゝとて  
 つ孫よ汚とと洗ひとてゝとてお水あれと  
 飲あよのゝ用とて一町あぬり満りて田の  
 どのれ水もあ洗ひとてゝとて後とてと  
 じつあゝとて色ふゆとてゆとて火とてく  
 時とて食ととてとて田煙裏の火とてあ  
 せ夏とてあつゝとて枕かやとてあつゝ  
 くもあゝとてつゝとて新築業とてあ  
 けんとて市に出る事あつゝとてあ人  
 といふ乃てあつゝとてあつゝとてあつゝ

孝養のよゆうをさふをあげて流おとせしとて  
 皆人感くあへり此のち祖父も血して之く  
 かやとては醫療をさるにを養へし事あるに  
 一二年にぬくはあゆむもあうこと成る夜と  
 なく執外とをけ飲食とすしめをたけしれよ  
 けと禁火にああやうは薪のそくくとせし  
 秘と祖父の明日のそと舞つうくあひし  
 薪を求ふにけぬすれそなかりとあをたれと  
 ことけぬとてあはれなりけり新穀とさるてゆり  
 事もあうき胡と蕎麦香煎こりよりのと細して

をあひてと粥をくくせ、夜ゆえとれも香煎とを  
 光酒をもとてけり、は新穀正東町よ新と  
 りらゆれく小魚ふ人暮ると老病を慰めうり  
 こあうれりの佐き揚う病と尋ねよまけれもの  
 とをうく慈よ女抱とら事神佛乃がよのりう  
 はりと給へるよやうに孫とて思て流とく流と流  
 一物流とけり、十七八をたうとふ人娘ういふ  
 人をとてけり、の多かりし祖父の病れとて  
 一と一とあひ、あひとてあひ、新穀もまじ  
 せん、あひとてあひ、あひとてあひ、祖父母のまじ



わしをさしてれを致恩とてさし世に〜とて者  
小のあふか天明六年八月領主より復員とて  
着と〜と〜をさしせし

孝義録卷之二十六

